エゾマツ

秋期号

NO 70

Y.K

2004. 10. 27

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

秋期号　NO，70

特集 － 行事

巻頭言　湿原について考えよう …… 会長　川端功治　(1)

1　小樽支部　大平山観察会 …… 倶知安町　松原健一　(3)

2　銭函天狗山観察会 …… 小樽支部　北原　武　(4)

3　帯広市野草園観察会 …… 帯広支部　小野寺実　(5)

4　大雪山ハイキングに参加して …… 富良野市　南部栄一　(6)

5　「大雪山ハイキング登山会」に参加して …… 春日順雄　(9)

6　森は何を語っているのだろうか …… 佐藤清一　(11)

7　平成１６年度　ボランティア・レンジャー育成研修会に参加して …… 田村允朗　(12)

8　マガモ …… 荻野裕子　(14)

9　イタドリへの想い …… 今村浩子　(16)

１０　自転車を描いてみよう …… 三崎　篤　(17)

１１　50嵐の　恣意的ブックレビュー　その(1) …… 五十嵐一夫　(18)

１２　ボランティア・レンジャー実践セミナー受講者募集　(21)

１３　懇親忘年会のご案内、など　(22)

編集後記

巻頭言　　湿原について考えよう

会長　川端功治

地球の温暖化について論議が進むにつれて、湿原についての話題も豊富になってきました。湿原について何が問題なのか戸惑う人も多いと思いますが、人間社会と係わり合いのあった過去の歴史をたどると、おのずから明らかとなり、これからなすべきこと、これから何をしなければならないのかが、おぼろげながら認識出来るものと思われます。

湿原の世界的な学者辻井達一博士にズバリ伺ってみ見ました。「地球の温暖化により陸地化が促進され、有名な名勝地尾瀬、釧路、雨竜の湿地もいずれは残念ながら消滅する運命にあるのでは？」と問いかけたら「貴方の言うとおりです」と答えてくれました。

「それだから明日と言わず、たった今からでも行動を起こしなさい。世界遺産を守り抜く為に貴方も必要とされています」と言う意味であること、と理解いたしました。

これはスケールの小さい話題ですが、札幌市の平岡公園で今話題の湿原を都心にそのミニチュア判を作り、市民の憩いの場にしょうとしたところ、思うように捗らず、原点に戻って市民の声を聞き、市民の描く究極の湿地のスタイルを求める会、即ち観察会の名目で市民の参加を求めた会合の募集があったので、参加してみました。

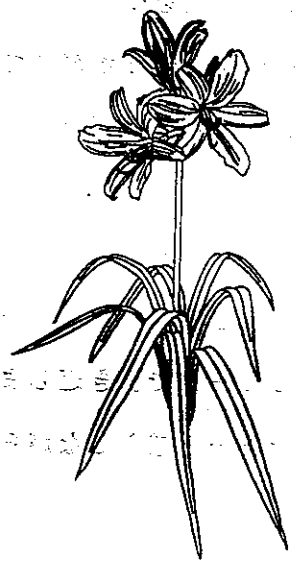
工事の概況は緩やかな谷間に流れる小川の両岸を利用した湿地を、数ヘクタールに亘る都心の公園としては大型な湿地造成地であります。

既に着工した下流域はワタスゲ、サギスゲが白い果穂を付け、根室コウホネ草の黄色が目立って美しく、次々と美しい花をつけるものと思われ担当の係員も胸を張って自慢げでした。

問題は上流地帯の放置試験区で、自然はどんな姿をみせるかを期待していたところ数年で荒れ放題のヨシ原になってしまったので本日参加者の忌憚の無いご意見を求めるとのことであったが、参加者は初心者が多くオフレコの言いたい放題にしてもらったら案外面白い結果になりました。　参加者同士の意見交換は市民のための工事であって業者の為の工事ではないことを自覚して市民税の節約に努める事、よくみかける料理屋の中庭などにある池に鯉と睡蓮式の日本庭園は駄目という意見の気持ちはよくわかります。

ところが意表を突かれたのは女性グループから提案されたのは、目前にある北ヨシに絡まって生えている「忘れな草」を増殖せよとの提案であります。田圃の畦や道端に生え原価はゼロ。こんなに安い苗代は無いはずだと提言。

忘れな草の語源が気に入らないと言う方も居る。恋人に捧げる為にこの野の花を摘んで居た彼氏が、スリップして濁流に呑まれ、追いかけて来た彼女に「私を忘れるな」と叫んで手にした花を投げつけ水中に没した。人々は哀れんでこの花を「忘れな草」と呼ぶようになった、と言うヨーロッパの伝説であります。卑しくも男たるもの死際に残された彼女の余生を拘束する「忘れるな！」とは何事ゾと苦言提言。これに対してこれは女性にとって壮絶なロマンであって、伝説は伝説として、現実は友人知人の送別や見送りのプレゼントにする女心に何の違和感も無いと主張する。忘れな草は外来種だから生態系を乱すので不可の発言。それならば日本の昔からある「忘れ草」の方が問題が無いのでは。ユリ科のワスレグサ属「ヤブカンゾウ、エゾカンゾウ、エゾキスゲ、」は湿原でお馴染みでもあるし、エゾカンゾウは禅庭花とも呼び,禅寺のお坊さんは、この花を眺めて浮世の憂いを忘れよと言う。西洋では「忘れるな」。東洋では「忘れよう」。この対比が面白いと手を叩いて喜ぶ人もいました。
以上歩行しながらの放談の再現で、行政は一切介入せず、情報は何等かの方法で収集して分析の上、次回の観察会に試案として提言するものと思われます。
回りくどい方法であっても多数の協力的な提言が得られる良い方法だと思われます。次回の観察会の募集がありましたら是非応募して見て下さい。お勧めに値します。



小樽支部大平山観察会

倶知安町　　松原健一

エーデルワイス（オオヒラウスユキソウ）に逢いたいと多くの希望があり、支部として懸案になっていた大平山登山を７月１０日（土）行いました。小樽を午前４時発のマイクロバス組やマイカー組併せて１７名の参加です。

当日は、朝からミンミンゼミが泣き出す暑さの中、登山口までは林道を山野草観察しながらの余裕のスタートでした。登山口標識を超え、しばらく造林地の間を進むと沢地形となり、直登の急斜面が続く。虻や蚊にも悩まされながらの汗だくの上りです。オオバタケシマランの赤い実、サンカヨウの青い実が気を紛らわせてくれます。やがて沢地形から尾根地形にでて、ブナ林をジグザグに上り、少し風もでてきてホット一息。樹林帯を抜け視界が開け、奥深い泊川上流の山並みが現れます。第１ピーク（７７０ｍ）まで背丈ほどあるササや山野草の中、またも急斜面を登っていきます。イワオウギ、オオハナウド、イブキトラノオ、タカネナデシコ、ミヤマコウゾリナ、トウゲブキなどが一面に白、黄、紫色に咲いています。

１１時１５分やっと第１ピークに到着。目の前に第２ピーク（１０７５ｍ）がそびえています。早い昼食をとり元気をつけ、オオヒラウスユキソウを目指して再出発です。昼食時３組のパーティと会っただけです。年間に３００人しか登らない山ということが納得できます。ウツボグサ、モイワシャジン、カラフトマンテマ、イブキジャコウソウ、ミネオトギリ、シロウマアサズキ、エゾシオガマなどを足元に見ながら１時間ほどでオオヒラウスユクソウにめぐり合えることができました。その可憐な花はちょうど満開であり、一行も大満足でした。山頂までまだ５０分もかかるので、第２ピークで引き返しました。下りも急で、一行よくこんな急な箇所を登ってきたなあーと感心しながら、全員無事に下山。宮内温泉で疲れを取り帰途に着きました。

銭函天狗山観察会

小樽支部　北　原　　武　（2004.6.4）

４０年前私は、銭函の大浜に在った会社社宅で、所帯をもったので、毎日、この山を眺めて暮らしていた。当時、２回程この山に登ったが、記憶に残っているのは、頂上直下あたりの石わらの一角から、かすかな湯気が漂っていたことである。この度、大勢の人々と登ってみて、その場所を探す余裕もなかったが、石わら辺りは多くの蔓茎類に覆われ、萱もあちこちに立っているのが予想外の風景だった。

銭天は標高５２０ｍ余の小さな山であるが、この度登ってみて、思いの外、手応えのある山である事を改めて知らされた。それは歳のせいかも知れないが、後になって同行の諸氏からも同様の声を聞いたとき、何となし納得することができた。

以下、参考までに山の紹介を少々させて頂き、報告にかえさせて頂きます。

この山は、登山口がわかりずらい難点がある。先ず、自家用車の場合は、バイパス取り付けを入って間もなく、大倉山学園の看板を右に曲がる。バイパス下をトンネルで通り、大倉山学園の先にある登山口へ向かう。付近に駐車場はなく道端の広い場所或いは、学園事務所に頼んでみるしかない。高速バス利用の時は、バス停「見晴」で下車、墓地と高速道の間の細い道を札幌方面に向かい１０分も歩くと、大倉山学園を通り登山口につく。

山道に入り１５分ほど歩くと「銭天山荘」が見えてくる。高床式でがっしりした建物に驚かされる。聞けば個人所有との事（連絡は加藤さん）。この辺り、ニリンソウ、スミレ類、レンプクソウ等が道端に彩りを添え、小屋先の沢道へ入ると夥しいバイケイソウ、上木には、ヤチダモ、トチノキが混ざっているのが見える。急な坂を登って尾根に出、更に汗が滴るころ、ロープが連続して４本ほど張ってある急斜面にぶつかる。それに掴まって、登ると一種の緊張感が走る。樹下の黄色い花はコキンバイの小群落、藪下に見え隠れするのはエゾノイワハタザオだろうか。

ロープの坂を登りきると急に目の前が開け、手稲連山の大パノラマが視野を埋め尽くす。春もみじと残雪が見事なコントラスト、青い海の彼方に白い帽子をかぶった暑寒の山々がまばゆいばかり、雨上がりのいい日に恵まれたものだ。

頂上稜線は、岩盤伝いの細い道、ヒメイチゲ、シラネアオイが時々顔をだす。札幌側は切れ落ちているので注意を要する。頂上は登山道先の岩の重なり合った所で、高みに、小さい標識がある。細い道筋に大勢が登ると他の人達の邪魔をしてしまい、気がひけてくる。早々に「桂が丘」に向けて下山。

総じて、見慣れた山だが、高度感があり、稜線の眺望に優れ、岩塊の道に不安を感じつつも、“いい山”という印象は拭いきれない。帰路は、何本も入り組んだ作業道に惑わされながら、途中、ナガハシスミレを確かめつつ、成長のいい広葉樹林帯を抜け、尾根筋のムラサキヤシオに別れを告げながら降りてきた。

今日は、好天に恵まれ、札幌の田村さん、三浦さん、倶知安の松本さん等のご協力添えを頂き行事を無事終える事ができた。心より感謝申し上げます。

帯広市野草園観察会

帯広　　小野寺　実

小さいながらも地域の植物を保存し、十勝の原風景ともいえる帯広市野草園は、市とともに運営委員会の協力もあって前田一歩賞を贈られた貴重な市の自然遺産である。

この度ボラレンの事務局や研修部の企画で、さる6月20に地域の会員と一緒になっての観察会が行われた。前日より田村副会長、小林研修部長など3名が来帯して現地を下見された。その夜は盃を傾けながらの交流会を行った。

当日は十勝の会員3名が合流し、野草園管理人も同行して園内を巡り観察した。

春から夏に移る端境期とて、開花している植物は少なかったが、4つに分かれている土壌に生育する樹木と草花は多様で、さすがボラレンの仲間だけあって、豊かな知識を披露しあいながらの園内の観察であった。

小野寺から同園の現状と課題について説明し、都市のなかでの自然の保存の難しさを述べた。

1時間半ほどの観察を終えて、会員から「小さいながらも大変豊かで変化に富んでいる野草園だ」の声や「市民が気軽るに疲れずに園内を巡れて、　親しみを深めるのにいい所だ」との声も聞かれた。

ボラ・レンが積極的に地方に出向いて、その地域の会員とし、その地域の自然の良さを見いだす企画は大変有意義であり、今回は参加者が少数なのが残念だったが、貴重な意見やを大事にしていきたい。同園は3年後に創立50周年を迎える。貴重な十勝の原風景を市民とともに保全と活用を積極的に進めたいと考えている。

大麓山ハイキング登山に参加して

富良野市　　南　部　栄　一

９月２０日　札幌の田村、春日さん、釧路の菅谷さんと富良野の地元から南部の４人が参加しました。実は７月１１日にも同山のハイキング登山会があったのですがこの山は昨年初めて登山会を開催したのですが長年、東京大学演習林の天然林として守られていた自然が自然愛好家、登山者等の間で評判となりインターネットでの申し込みが全国から殺到、自分だけはガイド引率兼救急要員として参加できたのですが、残念ながら何人か申し込みのあったボラレン会員の参加は認められませんでした。それで今回道内と地元の希望者中心のハイキング登山会が計画され自分達４人が参加した訳です。

大麓山は十勝岳連峰の最も古い火山で同山系の最南西端に位置します。また、この近辺は日高造山運動の最北端にも当たり地形的にも珍しく、火山岩盤の近くから深成岩やアンモナイト化石が見つかったりしているようです。麓郷資料館でこれ等の標本を見ることが出来ます。また、この山の標高は１，４６０ｍで頂上付近はハイマツとアカエゾマツの高山帯です。そして、山頂からは富良野岳。十勝

岳、境山、下ホロカメトック、原始ヶ原樹海、東大雪の山々、夕張岳、芦別岳、富良野西岳の展望は３６０度のパノラマが見られます。

９月２０日当日は田村、春日両氏と富良野の我が家で待ち合わせ

８時３０分麓郷森林資料館到着、ここで菅谷さんも合流する。

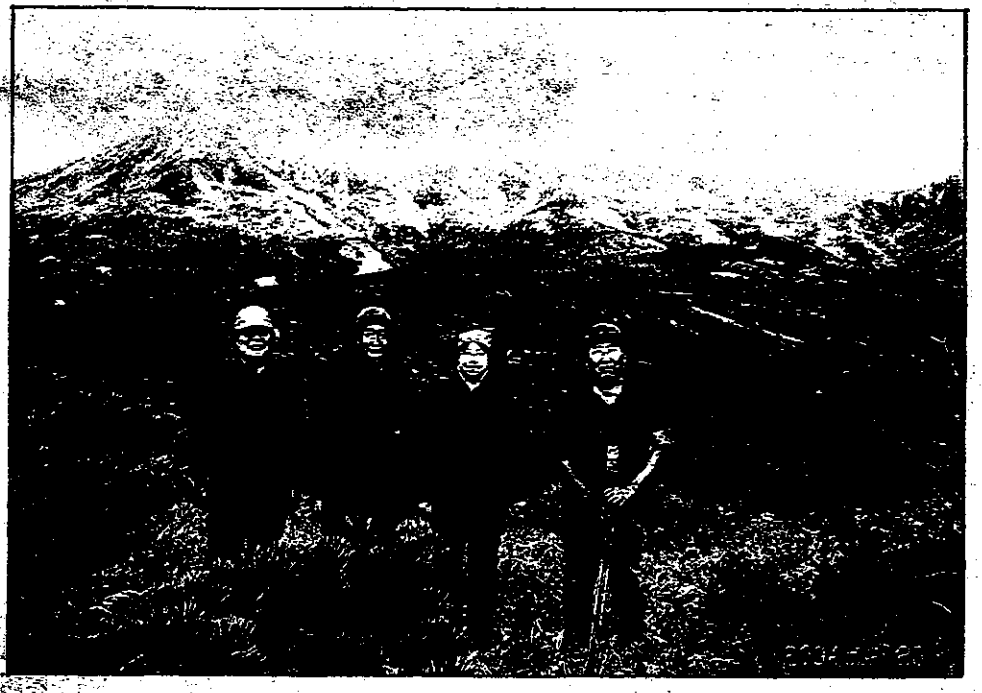
当日は４０人の参加があり、加えて東大演習林７名、富良野山岳会より４名のサポートがありました。

その後、酒井演習林長の挨拶、南部によるハイキング登山注意があり、９時１５分バスとその他の車で出発、１０時下車、１０時３０分登山道分岐、これより本格的登山道となる、そして道々演習林の方より木の話、地形の話を聞きながらの山行でした。１１時３０分山頂到着、この日は天気も良く、山頂からは見える限りの大パノラマを見ることが出来ました。１２時３０分下山開始。７月には体調不良の方も出たのですが今回は皆元気満々の下山となりました。

また、途中でクマゲラの巣穴を見たり、天然林での倒木更新の様を１０年目、３０年目、５０年目、１００年目単位で見ることが出来、説明を受けました。更に資料館到着解散後我々ボラレン４人組は資料館内を見学しました。この時、説明して下さった演習林助手の宮

本さんがボラレン育成研修第１期生であることが判りました。

また、演習林長も説明に加わって下さり、更に研修をするなら１泊食事付きで３，５００円位でと我々４人から見て魅力ある話もありぜひ、次年度の研修会には、宮本さんにも入会して頂き実現を期待しています。その後、４人で我が家でコーヒータイムを取り田村、春日さんは札幌へ、菅谷さんは釧路と帰路に着きそれぞれ無事に源着した充実した１日でした。来年は東大演習林のホームページを見て早めの応募で花の見所時期である７月ハイキングに多数の参加を期待しております。



大麓山山頂

「大麓山ハイキング登山会」に参加して

東大演習林の中にあって一般に開放されていない山

大麓山（標高1460メートル）は、富良野岳の真南、約6キロメートル、原始ケ原をはさんだ位置にあります。

この山は、東大演習林の中にあり、一般に開放されていません。ですから、登山のチャンスは、夏と秋の演習林主催の登山会のみです。

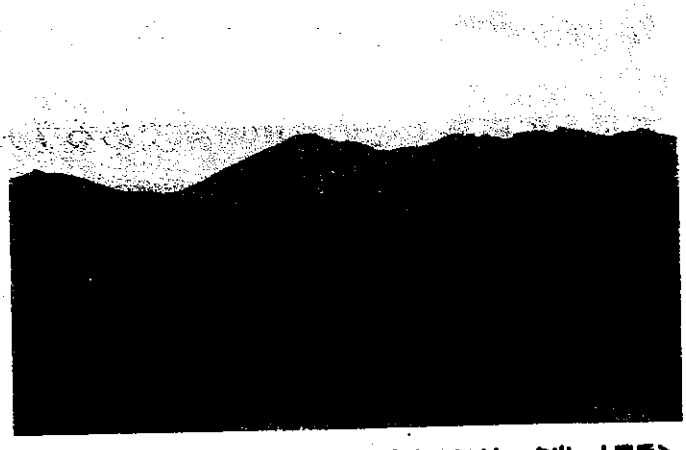
登山口は、倉本聡の「北の国から」以来、観光スポットになった麓郷にあります。1000メートル地点まで、演習林のマイクロバスで、そこから、林道を歩き、登山道に至り、頂上へという道程をたどります。

<林道を歩み登山口へ>

イワツツジ、クロウスゴなどの高山植物の実が多く見られました。これらの実が豊富だからでしょうか、登山道では熊の糞が何カ所かで見られました。演習林の所員さんにガードされての登山ですから安心感はあったのですが、少々驚きました。

頂上からの眺望抜群

富良野は北海道のヘソに位置すると言われます。ですから、大麓山からの見晴らしは、素晴らしいものです。この日は、高曇りでしたが、眺望の素晴らしさをかいま見ることが出来ました。



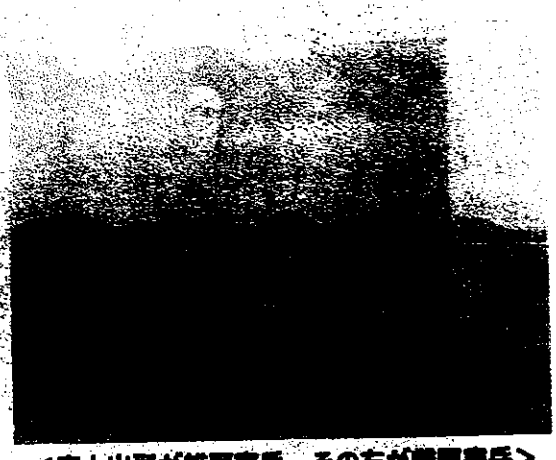
<左から前富良野岳・富良野岳・三峰山・上ホロカメトック山・十勝岳>

一番大きく、存在感を誇示するのは前富良野岳・富良野岳・三峰山・上ホロカメトック山・十勝岳の山々です。

東の方には、雄阿寒岳・雌阿寒岳が見えました。阿寒の山が見えるなんて感激でした。

北東方向には、下ホロカメトック山の左側にニペソツ山、右側には、ウペペサンケ山など、東大雪の山々が見られます。

西の方には、夕張岳・芦別岳が見えました。好天の日には暑寒別岳も見えるとのことです。

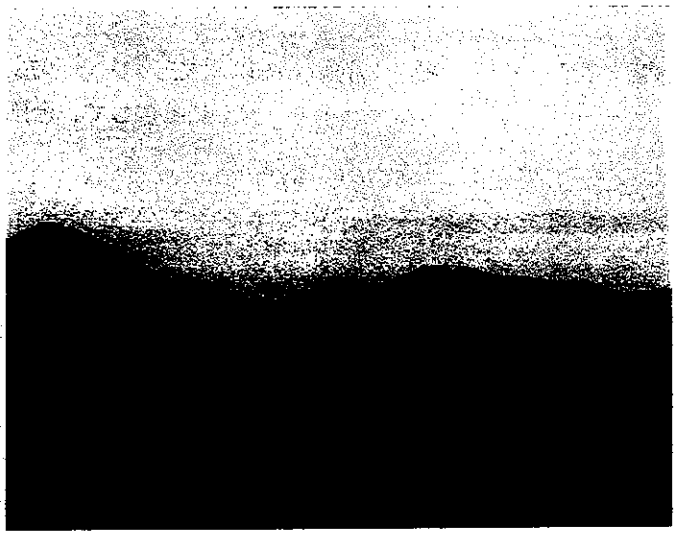


<富士山型が雄阿寒岳、その右が雌阿寒岳>

この日は見られなかったのですが、南の方には日高の山々が見られるそうです。

亜寒帯の樹林の典型

大麓山の森を、演習林の人は「原生林に近い原生林」と表現していました。森に入ってすぐのところに、わずかに、カラマツの林が存在したものの、他は、広大な針広混交林です。植物の水平分布の様子を表すのに「亜寒帯の植物」という表現をしますが、演習林の森は、まさに「亜寒帯の樹林」の典型的な姿をしていました。「原生林に近い原生林」は、このことに配慮した森の管理をし、育ててきたという表現でもありましょう。



<左が下ホロカメトック山、奥はウペペサンケ山>

寒帯の植物

マイクロバスはどんどんと高度を上げていきます。広葉樹はシラカバが増えていきます。しかも、ダケカンバの比率が増えていきます。バスから降りて徒歩で登山道に達したあたりからは、ハイマツと厳しい気候のせいで矮小化したエゾマツの混合した姿になります。頂上は、ハイマツとササの平坦なところでした。亜寒帯の樹林から寒帯の世界へ、大麓山は植物の水平分布と垂直分布に思いを馳せるところでした。

針広混交で良質の木材づくり

針葉樹は真っ直ぐにのびる性質があるのだそうです。針葉樹と広葉樹の森は、広葉樹も真っ直ぐに伸び、商品価値の高い材に育つらしい。針広混交林の中のウダイカンバを指さして「あの木も、あと百年もすると値の高いものになるに違いない。」という、職員の話がありましたが、いい森づくりへの人の関わりを感じることが出来ました。成長を百年単位で見る雄大な営みを感じ取ることが出来ました。

<イワツツジ>

倒木更新

親は子の踏み台。倒木更新は、エゾマツやトドマツの命を継承していく姿です。その実際を見ることが出来ました。同一樹齢の木が一列に。まだ、株立ちしていない新しいものと、株立ちしているものとが、接近した位置にありました。参加者みんなが、生命の継承の厳粛さ、崇高さに感じ入ったという姿で見入っていました。
本当に、東大演習林は懐の深い、良い森でした。

<クロウスゴ>

<春日　順雄　記>

森は何を語っているのだうか

――「１０Ｋｍエコ・ハイキング」に参加して、台風の傷跡を見ながら――

佐藤　清一

私たちの新しい企画、野幌森林公園内での「10ｋｍエコ・ハイキング」、それは台風18号の影響で、多くの木々が幹から折れたり、倒れたりしている痛々しい場景を見る観察会になってしまった。本来、このハイキングは紅葉する美しい姿、やがて冬にむかう樹木たちの様子を確かめるものであった。

だが、９月８日の台風18号の激しい風によって、木の幹が折れたり、根もとから倒れたり無残な姿を露にしていた。植樹されたトドマツなどの針葉樹、シラカバ、ヤチダモ、ハリギリなどの広葉樹、とくに樹齢250 年位のハリギリの巨木が倒れていた。歩いたなかで＜エゾユズリハコース＞が最もひどい被害を受け、植樹されてかなり大きく育っていたトドマツが壊滅的な状況であった。倒木のなかには病虫害に冒されて余命のないものもあったが、それに抗して若々しく凛として輝いていたと思われる木々もかなりあった。トドマツの植樹は昭和12年で、苗を育てるのに３年位かかるようで樹齢は70才位になっている思う。私の年令もそれより少し若いが、自分の生と重なるようでとても複雑な思いがした。

倒木の原因は、樽前山の火山活動によって降った火山灰の上で根が浅かったり、植樹された木々の手入れなどが十分になされなかったり、さらに台風の進路の東側に位置して激しい風を受けたことなどいろいろあげることができると思う。

荒廃した森の状況を見るとき、自然のサイクルの一つの破綻を示しているのは確かであろう。すぐに太陽の光りが射し込み植物たちの再生の強い歩みが始まるにしても。

樹木などの美しく生命感にみちた表層だけでなく、土壌や水の流れなど大地の深層にまでせまって自然の仕組みを謙虚に学んでいかなければならない。

台風の傷跡のなかにも、その風水に耐えて生きるナナカマド、カエデたちの紅葉に、赤や黒の果実をつけた輝ける草木たちにも会えた観察会でもあった。更に、オオアカゲラ、コゲラなど冬に向かって準備をする鳥たちの生の営みにも会うことができた。

参加者は15人で、私たちのサークルの仲間が多かったが、会員以外の参加者とも自然に対する想いを語りあえた深みのある行事になった思う。

平成１６年度　ボランティア・レンジャー育成研修会に参加して

事務局　田　村　允　郁

平成１６年度の育成研修会は留萌市の留萌合同庁舎をメインの会場として開催されました。この研修会の修了者によって構成されている本会にとって、例年行われている育成研修は大切にしていかなければならな場です。修了の皆さんが本会に入会していただくお誘いと、あわせて実践セミナーへの参加のため８月２０日～２２日、会場の留萌市にいってきました。

２０日は朝から雨でした。自家用車でいく予定を変え高速バスで留萌に向いました。会場となる留萌市内の北海道留萌合同庁舎周辺も曇り空で時折の雨でした。

参加人数は育成研修と実践セミナーを合わせて３０名を少し上回るゆったりとした雰囲気でした。

開会式に続いて、アイスブレイクによる仲間作りが始まりました。知らない者同志の心が打ち解けた頃をみはからい、育成研修・実践セミナー合同研修が早速「野外観察時における救急救命法」のテーマで始まりました。

留萌市の消防署関係の方による実習を中心とした講義です。２グループに別れ人工呼吸と心臓マッサージ法を一人ずつ実際に行います。手順をうっかりパスしたりして、何度も継続していかなくてはならないものだと体感しました。対象を大人ばかりでなく、子どもや幼児の方法など年齢に応じた方法があることは貴重な体験でもありました。その他、負傷者への対応の仕方や緊急時の担架の作り方など野外で役立つ救急法を３時間余の講習でした。講習終了後「普通救命講習修了証」カードを交付してもらいました。

救急救命法の講義の後も、別の講習メニューがあり、宿泊場所に移動し夕食にありついたのは、午後７時を過ぎていて、密度の濃い１日目でした。

２日目は野外実習が中心に講習が組まれています。朝食後、バスの移動で「ルルモッペ　憩いの森」へ向いました。この森は留萌市街と日本海を一望できる千望台というところに隣接しており、森林浴やバードウォッチングなどを楽しむ留萌市民の憩いの場所と利用されている所です。

２日目は育成研修グループと実践セミナーグループに別れての実習です。私が参

加した実践セミナーグループの前半は興味関心を持って自然を体感したり森を体感する方法の具体的メニューが講師より示され、実際に観察会を運営する際の知恵を授かった気がしました。後半は地元の観察会を実践されているボランティアの方が講師になってのフィールドワークです。このころになると空の雲行きがあやしくなり、雷もなりだし、いまにも雨がきそうな雰囲気になってきました。せかされる気分で樹木や野草の検索をしましたが、一気に雨が降り始めます。四阿の中で雨をしのぎながら樹木や野草の検索のまとめをしました。

午後になっても雨は時折激しく降っています。午後のメニューは海岸にでて海鳥の生態の講習でしたが、室内での講習に変更となりました。あまり機会のない海鳥のフィールド講習に期待をしていたのですが天候には勝てません。しかし、羽幌海鳥センターの講師の巧みな話と講義によって、室内での研修も大変興味深く参加できました。ウミウの形態や生態をぬいぐるみを使って体感させてもらったり、海鳥の置かれている現状を知ることができました。

この日も、研修は午後７時まで続きましたが、夕食後、希望者による懇親会が会費制で行われましたが、道の自然環境課や講師の方々も参加していただきました。楽しい一時の親睦懇親がはかられました。

最終日は、実践セミナーのグループの作った自然体験プログラムを育成研修グループの皆さんに参加者になってもらい発表するメニューです。３つのグループに各々テーマが与えられます。企画したプログラムと実際場面のギャップがあり、観察会等の企画運営をする際の実践課題を与えられた思いがしました。

午前で全ての日程が終わりました。育成研修者には修了証書と胸章が渡されました。主催者の道自然環境課の方々や講師の方々に大変お世話になりました。次年度以降も歴史のあるこの育成研修並びの実践セミナーを引き続き計画されることを切に希望していきたいと思います。

今回の研修会で育成研修会を修了された方々のうち８名の皆さんが本会に入会していただきました。これからの活動を共に進めていき、会の発展につなげていきたいものです。

札幌への帰途は、開会日の雨天と異なり快晴でした。高速バスが動きだししばらくすると車内でラジオの放送が時折聞こえてきます。耳をそばだてると夏の甲子園高校野球の決勝戦でした。駒沢苫小牧高校の熱戦とともに札幌へともどりました。

マ　ガ　モ　(Anas platyrhynchos)

荻野 裕子

「黄色いバナナの嘴」と「幸運のカール羽」

いま、冬を迎え春から私達の目や耳を楽しませてくれた夏鳥達も南へ越冬に去って行きました。代わりに遥か北の大陸で繁殖を終えたハクチョウやカモ類が冬を越しに訪れ始めています。

今回はカモ類の中で北海道でも繁殖し、一年を通し身近に観察できる「マガモ」をご紹介させて頂きます。

マガモの学名はアナス・プラティリンコス、「平たい嘴を持つカモ」と言う意です。標準和名のマガモの由来は、「普通のカモ」と言う意のようです。「カモ」は「浮かぶ」から転じで付いたのではと言われています。

マガモは学名の由来にもなった「平たい嘴」で主な餌である水草や草の種、水棲昆虫を啄ばみ、泥や水面に浮かんでいる餌を漉すように採食します。

時には、赤橙色の足を見せて逆立ち採食をしたり、驚くほど長い間水中に潜って餌を採るユーモラスな姿も観察することができます。

皆さんはマガモと言うと、頭が緑光沢のある黒で、首には白い輪があり、胸はぶどう色の「黄色いバナナ」のような嘴を持つ姿を思い浮かべることでしょう。

実はそのマガモの姿は雄の繁殖羽なのです。

探鳥会でよく、全体が褐色で嘴が黒く周辺はオレンジ色をした嘴を持つ雌を「マガモとは違う種類なのですか？」と言うご質問を受けます。

雄は春から夏の繁殖期に備え晩秋から冬にかけ上記のような美しい羽に変ります。

カモ類は普通、越冬地で番相手を決めると言われています。

これからの時期は、マガモの雄は美しい羽に変身し雌にプロポーズする繁殖のための大切な季節なのです。

今号の「エゾマツ」が届いた頃のマガモの雄は、まだ美しい繁殖羽になっていない雌のような地味な姿の個体や、少しだけ頭が緑光沢を帯びた繁殖羽に移行中の個体を観察できることでしょう。

このように美しい繁殖羽ではなく、雌のような地味な羽の状態をエクリプス（覆

い隠すの意）と言います。

でも面白い事に、どんなに雄が羽を地味なエクリプス状態にしていても、あの「黄色いバナナ」のような嘴だけは変身することが出来ません。

ですから、「バナナのような黄色の嘴」は雌と同じ様な姿になる非繁殖期の雄を識別する重要なポイントになります。

それと、普段何気なく観察しているマガモ雄の繁殖羽の尾の上に、内側にカールした黒色の小さな羽がある事に皆さんはお気づきでしょうか？

この小さなカール羽は雌を引き付ける為にあると言われています。ですから、繁殖期が終わると、その小さなカール羽は羽根ごとポロリと抜けてしまいます。

私の知人に夏、ポロリと落ちたカール羽を拾った幸運な方がいらっしゃいます。

どうぞ会員の皆さん、これからの時期じっくりとマガモ雄の繁殖羽を観察して頂き、来年の夏には是非「黒いカール羽」を拾う幸運な機会に出会えますように！

参考文献　フィールドガイド日本の野鳥　（財）日本野鳥の会　　鳥６３０図鑑（財）日本鳥類保護連盟

日本動物大百科鳥類Ⅱ　平凡社　　「鳥の名前」大橋 弘一著　東京書籍

マガモ♂　イラスト　　（財）日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ

川崎 慎二 チーフレンジャー

イタドリへの想い

今村　浩子

１０月８日は木の日だそうです。知っていますか？

その木も色づきはじめ、やがてめぐる春に、思いをはせる、私たちですね。景色の中に。

イタドリの話（タデ科）雌雄異株、種は三枚の翼により風で散布、道南に一部葉の付け根が直線的な「イタドリ」がありますが。

私たちがよく目にするのはハート型の「オオイタドリ」です。

火山地帯など過酷な環境にも強く、春先、水を吸うとすぐ発芽する大型のクローナル植物です。地下茎が栄養成長を繰り返し、ごぼうのような根が、40度の角度で枝分かれ這って群落を作ります。角度のせいでドーナツ状になり、中心にイネ科、キク科、ヤナギ、ススキ、が侵入して育ちますが、大型の葉はその肥料となり、時間をかけて先駆種的役割をはたしているのです。

漢名で虎杖といい、北海道の地名にも虎杖浜、アイヌ語で屈足クッタラ湖があります。

虎の杖とは大げさな表現にも思えますが、節が多く葉の模様などからすると中国ならではのロマンにみちた呼び名であるように思います。

子供の頃、スカンポといって遊びましたが、このイタドリは多年草で、古くなると木<ナハだそう（？）ですが>質化するそうです。

春先、天ぷらなど料理に使用したり、蓚酸を含むので10円玉を磨いてピカピカにするのもおもしろかった思い出があります。

葉の落ちた今は、茎も美しいので、リースオブジェ、クラフトに楽しでいます。　皆さんはいかがですか。

自転車を描いてみよう

三崎　篤

毎日毎日、沢山のチラシが新聞に折りこめられて届きます。ＰＲ戦略として欠かすことの出来ない手段ですからしかたありませんが、私にとっては、資源の無駄とかしか言いようもありません。

でも、パチンコ店のチラシは良いですね。新装開店したとか最新機種をそろえたとか、訴求項目が比較的少ないのでしょうか、ほとんどこの手のチラシの裏は白紙が多いのです。

おかげでメモ用紙代わりに、落書き帳代わりに大変重宝しております。

お手元近くに、パチンコ店のチラシがありますか。そこにこれから絵を描いてください。描いていただくものは、「自転車」です。子供のころから慣れ親しんだ乗り物ですね。それを頭に思い浮かべて描いてみてください。制限時間は10分間です。

・・・

どうです、スラスラ描けましたか。

実は、これはある研修会で試されたことなんです。残念ながら私は時間内に描くことができませんでした。前・後輪や、ハンドル、サドルなどの位置はだいたいわかるのですが、描いてみると、妙に長い自転車になったりで容よく描くことができませんでした。

私と同年代の人でしたら、大人の自転車で、先ずは、サーカスまがいの乗り方「ヨコ乗り」を会得し、次いで「立ち乗り」そして地面に足の届くようになってからようやく「本式のり」と生傷と引き換えに会得したものでした。

パンクの修理はもちろん、分解掃除までこなした、もっとも身近な乗り物「自転車」、それが描けないのです。

口惜しい思いで帰宅、直ちに実物を前に描いてみました。描き進むうちにうまく行かないわけが解りました。

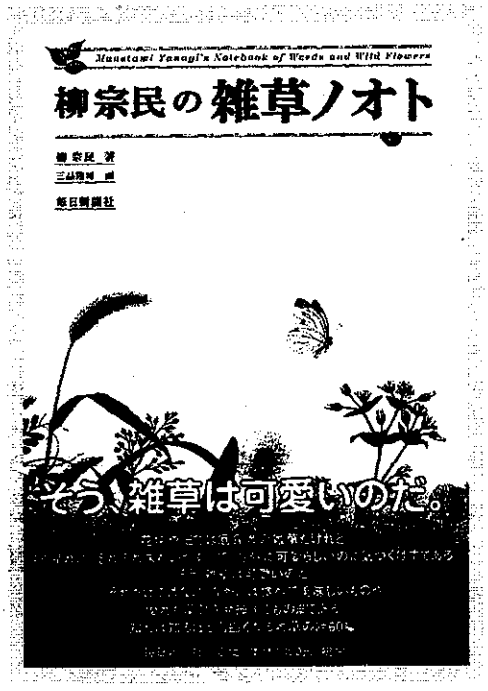
自転車の構造は普通の軽快車の場合、上パイプ（女性用はこのパイプは斜め下方に向かってついている）、下パイプ、立パイプが連結した三角形が基本構造でこれに、立パイプを一辺として後輪を支持する後ホークとチェーンステーがつながってもう一つの三角形が形つくられている。つまり基本形は二つの三角形がつながった菱型で、これに前輪を支持する前ホークがついているのです。この形さえきちっと抑えておき、これにハンドル、前・後輪、サドル、クランク・ギアをつけるとイメージどおりの自転車を描くことができるのです。まずはこの菱形をきちっと決めるとことがポイントでした。

観察会に参加していつも思うのですが、実によく植物や鳥の名前を知っている方がいます。もちろん数多くの機会を自らつくり知識を深めていると思うのですが、そればかりではないようです。じっくり観察しながら頭の中で絵を描いているのではないでしょうか。そして対象となるものの基本部分を見極め、それに微妙な部分や変わった部分を探し、答えを導き出しているのではないでしょうか。

50歳の 恣意的ブックレビュー その1

本職が忙しく役員会を欠席した。半月後、広報部長からエゾマツのブックレビューコーナーを受け持てと電話をいただいた。「欠席裁判ですかぁ?」。「そうですっ！」。日頃ろくに寄稿もしないつけが回ってきたと観念し、引き受けることにした。受けた以上は、面白くないからいい加減に止めろと言われるまで続けるつもりなので、おつきあい願いたい。でも、書評って「おもろい。」「おもろない。」ってあるのかな。

新しく出た本というのは、何かと本屋で目にするものです。新刊の目利きは皆さんそれぞれにお任せするとして、ここでは、発刊から時間がたったけどやっぱり良い本だなぁといったものにスポットを当ててみたい。ものによっては賞味期限ギリギリのものもあろうかと思う。ほしいと思ったときにはすぐに本屋に問い合せて下さいませ。



柳宗民の雑草ノオト

柳宗民　著
三品隆司　画
毎日新聞社　1890円
ISBN4－620－31596－6

まずはこの本。２００２年１２月発刊。１つの植物に４ページを割いている。見開き２ページに解説とイラスト、さらに２ページ解説が続く。著者は、NHKの趣味の園芸に出演している人で、解説は園芸種や外国のものにまで及ぶ。学名も丁寧に記して

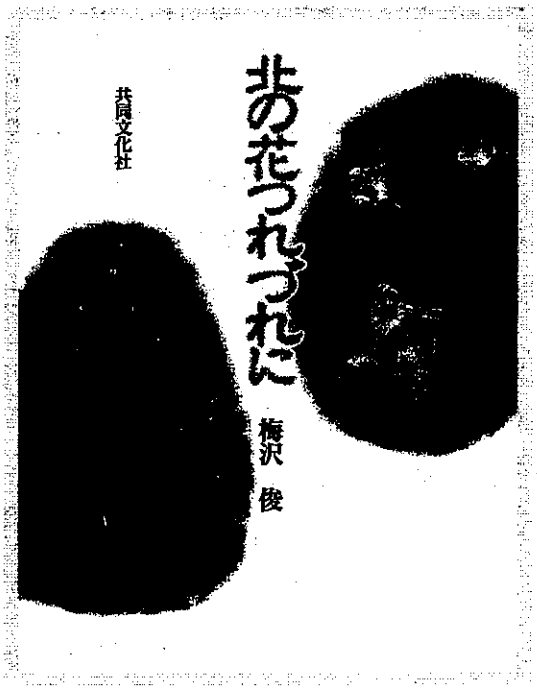
あり、その意味までも言及しているので、観察会のネタに使えるものが多い。春・夏・秋と分けて６０種の草本について解説していて、索引は日本語と横文字の２種類付いている。雑草ノオトなのにフデリンドウがあったりして、おやっと思う。本州では雑草なのか?　身近に普通に見られる草という意味で雑草とつけたそうだ。あとがきには昭和天皇が「雑草という植物はない。」といわれたエピソードが書かれている。「俺だって野鳥だぞ。」by　カラスと言ったところか。ここまで書いて、似たような体裁の本を思い出した。

草樹との出合い

鮫島惇一郎　絵と文
北海道新聞社　1800円
ISBN4－89363－775－4

皆さんご存知の超有名人、鮫島先生の本です。こちらは１９９５年５月に発刊。もう１０年も前になるんですね。見開き２ページに解説とイラストの構成。北海道新聞の日曜版に１９９３年４月から２年間続けた連載１０２回分に６つ加えた１０８の植物について、解説というよりは、ほのぼのとした物語が描かれていて、心安らぐ１冊です。道内各地の昔の様子が思い出され、それに比べて今の有様は、と胸が痛みます。

個人的には、観察会の資料に使う植物の絵として、この本のイラストをずいぶん無断借用させていただきました。多謝。



北の花つれづれに

梅沢俊　文と写真
共同文化社　1890円
ISBN4－87739－126－X

ここまで来たらもう一冊。夕張岳の調査区を鹿に踏み荒らされて「エゾオオカミという最大の天敵を滅ぼしてしまった人間が鹿にばかにされているように見えるのは私だけでしょうか。鹿によって破壊された自然を屍（しかばね）と呼ぶことにしています。」。盗掘や踏み荒らしにまったく無防備で、学問的にも貴重な静狩湿原を見て『地元の「宝」に気がつかない自治体ってあるんですよね。』など、梅沢節が全開。ときに苦笑いしか出ない駄洒落もありますけど。１９９５年５月から１９９７年９月まで朝日新聞北海道版に８０回連載したものに１１編を加えて木本・草本併せて９１の植物について解説している。もちろん俊さんの写真付き。１９９９年３月発刊。連載時に利尻島でみつけたリシリアザミが新種として確認されています。それからもう１つ、エゾノレイジンソウの写真はすごいですよ。花が紫色なんですから。本文ではエゾノレイジンソウとしていますが、これも後からハゴロモレイジンソウとして新種と確認されました。どちらも学名に umezawa がついています。ハゴロモレイジンソウは、後志の仲間があちこち探し回って、現在ニセコ周辺の４箇所で確認されています。通称名はニセコレイジンソウ。

初回はここまで。こんな感じで毎回続けていこうと思います。紹介した本の順番には何の意図もありませんよ。文章の構成上こうなっただけのこと。念のため。

こんな本もあるよ、という情報お待ちしています。

（副会長　五十嵐　一夫）

ボランティア・レンジャー実践セミナー受講者募集

道の自然環境課主催による育成研修会を修了した人たちを対象にした「日帰り実践セミナー」を今年度開催していただくことになりました。

よりよい自然解説員をめざして、心理学の視点や演劇の要素を取り入れたセミナーです。また、北海道の冬を楽しむために冬にしかできない屋外活動やネタづくりも行います。

私たちの研修の場を設定していただいた、道の自然環境課に感謝すると共に多くの会員の参加をお願いします。

日　　時　　1回目　平成１６年１２月４日（土）　１０時～１６時
　　2回目　平成１７年２月２６日（土）　１０時～１６時
　　（１日だけの参加も可能です。定員２５名先着順受付）

場　　所　　野幌森林公園ふれあい交流館　レクチャールーム
　　（〒069-0832　江別市西野幌６８５－１）

研修内容　　1回目
・心理学的視点からどのような自然解説員が参加者に好まれ、参加者自ら学びたくなる場を提供できるかを学びます。
・冬を楽しむ屋外活動の実践を行います。

2回目
・シアターゲームを通して身体を使ってコミュニケーションをよくする方法を学びます
・参加者が気づき気になるネタを作ります。

申し込み　　野幌森林公園ふれあい交流館へ電話で申し込んでください。
　　（℡ 011-386-5832 月曜日・祝日は休館です。）

申込締切　　1回目　平成１６年１１月１９日（金）
　　2回目　平成１７年　２月　４日（金）

そ の 他　　・参加費１００円（保険料）
　　・筆記用具、弁当、飲み物、屋外で活動できる服装

懇親忘年会のご案内

平成１６年の活動も一段落しました。会員の皆さんの実践活動の交流のなかから新年度の方向をさぐっていきたいと思います。その一つの場として、忘年会を兼ねた懇親会を計画しました。

春からの活動や自然情報の交流を通して、会員相互の親睦を図っていきましょう。多くの会員の参加を期待しています。

日　　時　　平成１６年１２月１１日（土）　午後５時より

場　　所　　魚一丁（うおや一丁）時計台通り店

札幌市中央区北２条西３丁目（ホテル法華クラブＢ１）

会　　費　　３５００円（当日会場で頂きます）

申し込み　　事務局　田村（電話で受付ます。TEL 011-791-0127 ）

申込締切　　１２月５日（日）

平成１７年度の活動計画について

平成１７年度の活動計画については、１月に予定されている役員会にて原案を作成することになっていますが、会員の皆さんの意見・要望をできるだけ反映させていきたいと考えています。

次年度の観察会や会員研修について、考えをお持ちの皆さんの発信をお待ちしています。１２月中までにお願いします。

連絡先　　研修部（小林　麻生市恵み野東5丁目3-1 TEL 0123-36-3944 ）

事務局（田村　札幌市東区東苗穂11条2丁目14-18 TEL 011-791-0127 ）

編 集 後 記

・ 風趣ある「エゾマツ」の表紙は、会員の熊野美子さんに描いてもらいました。

・ 私たちの活動の柱である<行事>について特集を組みましたが、原稿の依頼が遅かったりして、不充分になってしまいました。
今後はあらかじめ行事の実施前などに頼むようにしていきたい。

・ 会員のみなさんに原稿をお願いしたい。
内容－　自然との出会い、想い、観察会、登山、支部活動など自然にかかわることなど。
形式－　この機関誌で１～２ページ程度。できればパソコン、ワープロなどで。
予定－　2005年１月２０日位までに。冬期号の発行は１月下旬予定。
広報部－　北広島の佐藤まで。

・ 今年は、本州などでは記録的な猛暑が続き、大型台風が何度も上陸し、全国各地に多大な被害をもたらしました。更に追い打ちをかけるように新潟中越大地震に襲われ惨憺たる状況になってしまいました。
猛暑、台風などの自然の猛威・暴威は私たちが快適な生活を求めてつくりだしてしまった地球温暖化への反撃であり復讐であるのかもしれない。
自然の偉大さとともに恐ろしさを見せつけられました。
自然に対して驕ることなく、そのメカニズムを謙虚に学びながら生活していかなければならないだろう。
豊饒な大地よ、願わくは、その荒らぶれる心を抑えてほしい。